

事前の自己レッスンを重ね、定例レッスン に集中しましょう！

1月29日

□1月29日(日)14:00~17:00 昂定例レッスンが開催されました。佃さんの入念な体操と本並先生のヴォイストレーニングのあと、「フィンランディア」「ルスカエ・ポーリエ」「ヴォルガの歌」とレッスンが始まりました。休憩をはさんで、引き続き本並先生の指揮で、「仕事の歌」「想像力」「忘れっぽいひとに」と6曲のレッスンとなりました。ピアノは森二三さん。参加者は全32名でした。



□指揮者から、「フィンランディア」の開始早々、団員への初歩的な、しかし厳しい注文の声が飛び出しました。「**出だしから合わせる集中力を！**」と。練習に当たって指揮者の最初の一振り・出だしからよく見て、合わせる集中力を出して欲しい！だらだらとした気分では入らない！また個人レッスン(自習)とともに、1回1回の昂の定例レッスンで、自分に収穫のあるようにしてほしい。(次にまた同じことの繰り返しはしたくない・・・)「フィンランディア」は最初から遅れないように！指揮者はこの曲はテンポを動かして揺らして変化をつける。指揮をよく見て、遅れないように合わせてほしい。今のみんなの歌い方は私のイメージと違う。「ななつの」の「なー」から音の出し方が大事！声の出し方と合わせ方がこの曲の命だ。「ななつのうみこえーひびけー」とは！なんとすばらしい詞(ことば)だと思いませんか！・・・と。

□次回2月3日(金)定例レッスンのレッスン曲は「君死にたもうことなかれ」「想像力」「忘れっぽい人に」「花の歌」「ぶどうとかたばみ」「このみち」「人間のうた」(がんばろフェスタ)です。事前練習を！

□2月18日(日)「2017日本のうたごえ協議会全国総会」(金沢市)に大阪を代表して山本さんに参加していただくことになりました(大阪から11名)。総会で予定しておられる「発言内容」が昴ニュース担当の方にも届いています。感動的な話の一端をお伝えします。(編集子)

日本うたごえ協議会総会 発言内容

山本宏司(男声合唱団「昴」所属)

大阪の男声合唱団「昴」入団1年目の山本と申します。入団に至った思いを述べさせていただきます。

昭和22年生まれの私は団塊世代の先頭で、学生時代はまだ沖縄は日本ではなく、ベトナム戦争が続いていて、その沖縄から爆撃機が飛び立つという現実があり、これらの状況とも深く結びついて日本社会そのものは、高度経済成長の真っ只中で、大量生産、大量消費、大量廃棄、右肩上がり大絶賛の世の中でした。その結果の一つとして、都市の空と川や海は汚れに汚れていた時です。自分たちの貧しい暮らしと政治・経済とのかかわりを否応なしに考えさせられる時代でした。しかし、就職してしまうと、職場の志向もまた右肩上がり、仕事に追われる毎日でした。

定年まで35年間を何とか勤めたものの、流れに十分乗ることのできない私は、最後の8年間は閑職につかされました。そしてその3年目に思い当たったというか、開き直ったというか、この流れから降りようと思ったのです。時代の流れから「落ちる」というのは、不本意などかわからない場所に行ってしまうということですが、「降りる」というのは自分が定めた場所に行くことですから、心落ち着かせてくれます。

定年後は、外国語も習い、好きな木工と定年の数年前に友人に誘われて入った混声合唱とを楽しみながら日々暮らしてきました。しかしながら、いつも何かしら物足りなさを感じる毎日でした。定年後の豊かな人生というものがあるとすれば、そこに通じる私の扉は半開きでしかなかったのでしょう。

一方で安倍政権ができてからの日本の政治の様子は、憲法がないがしろにされ、軍靴の音がどんどん大きくなっていくような状態です。趣味だけで楽しいとは言ってられない日々が長く続くこととなりました。それまでやっていた混声合唱は、こうした世の中とは全く無関係に、美しい合唱を求めるばかりでしたので、急激に魅力を感じなくなりやめてしまいました。

こうして一層不十分な日々を半年ほど続けたとき、縁あって2016年1月末に開かれた男声合唱団「昴」のコンサートを知り、聴きに行きました。会場は大阪市内で超有名な「いずみホール」です。初めは、うたごえの合唱団がいずみホールでコンサートをするというのが、自分にはあまり馴染みのない感覚だったのです。入ってまず驚いたのは、800を超える客席は満席状態だったことです。しかも合唱団の平均年齢が70を超えると知りました。

しかし演奏はとても力強く、歌う喜びにあふれるものでした。そしてその歌う姿は、聞く者に寄り添い、自分たちの暮らしは自分たちで切り開こうというメッセージを送っているように感じられ、感動を与えてくれました。演奏会が終わって、私は、学生時代によく聞いた“うたごえは平和の力”、“生活に根ざした歌を”というフレーズを久しぶりに思い出しました。

ここで一緒に歌えば、自分の中途半端な人生の扉を全開させる力を与えてくれるかも知れないと強く思ったのです。演奏会の2ヶ月後、昴に入団いたしました。入団してまた驚いたことは、1月の演奏

会後に入団した人が私より先に 6 人もいたということです。うたごえの、昴の一員として、自分にも多くの人にも道が開けていくような歌を、素晴らしい仲間とともに歌い続けて行こうと思っています。

昴 1 1 回コンサートコーナー

「ぶどうとかたばみ～ボスニア・ヘルツェゴヴィナに～」

「ぶどうとかたばみ」は作曲家・新実徳英と詩人・谷川雁によって 1989 年から 1995 年までに作曲された合唱曲のシリーズ「白いうた 青いうた」の中の 1 曲。曲の成立は、新実徳英の曲にあとから谷川雁が詩をつけるという、珍しい形をとっている。これらの「シリーズ」は全部で 53 曲あり、「ぶどうとかたばみ」のほか、「壁きえた～ベルリンの壁崩壊～」などもその中の 1 曲である。（「壁消えた」は男声合唱曲集(1995.6 刊)8 曲の曲集名にもなっている。）

「ぶどうとかたばみ」について 私の解釈

生きる場所も見かけも全く異なる2つの植物「ぶどうとかたばみ」のタイトルは此の詞に余り重要な意味は無いと思う。

詩作者の谷川雁は異民族どうしの紛争描写と共に谷川氏自身の感覚で 葡萄と酢漿草を象徴にしたかったのでしょうか。では此の「ぶどうとかたばみ」は何の象徴なのか？

曲の歌詞から察するに…足下で目立たないが荒地も太陽熱も怯まず自己主張しながら小さな葉を寄せあい逞しい生息力の「かたばみ」は多くの異民族そのもののでしょうか？

では「ぶどう」は？と思うに これは複雑です…豊かさの象徴でしょうか？地に有る酢漿草を嘲笑うように…天空で、たわわな実りは誇らし気に連なっています。

葡萄は 酢漿草の夢、希望かもしれません。それとも、もしかしたら…放送や紙上ニュースで遠い他国の紛争を知り、ただ、ただ気遣いの想いを馳せるだけの私たちかもしれない…という気もします。

とにかく 私たちは作者の谷川氏自身ではないので作者の真意は不明ですし 又それを作者に訊いても 作者自身困るかもしれません。というのは こういう詞や絵画等々、芸術文化に属する表現解釈は総じて それに接した個々の自由な解釈に委ねられていますから 答は一樣では有りません。一般に「如何なる創造も作者の手を離れ発表したらもう作者の物では無い」と言われています。ですから昴においても此の曲に限らず一人一人の感覚で解釈…それを交流し、想像と創造を養う機会にすれば曲への意識も深まり本当に楽しいと思います。皆さん、お互いに張り合ってセンスを磨きましょう。 本並美徳

(追記)

今日、解釈文とは別に 葡萄の事など色々話しましたが 未だ余談があります。解釈文の後半に書いた…創作品は発表され、世間に出たが最後、作品は一人歩きをし 色んな人に様々に解釈される事で 作品はドンドン成長し、大作になるのです。もし作者が他人に勝手な解釈をされたくなくて 手放さず 作者の下に抱え込んでしまったら 作品は其れ以上成長できません。そう考えると 人間も同じですね 若者は社会へ出て 色んな所で色んな人に揉まれる事で成長すると言われますからね。

・ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争は、民族紛争。（「ぶどうとかたばみ」の背景）
同じ地域に住む人々、恋人同士がある日突然に敵と味方に分かれる。

この戦争を解説した Wikipedia の記事がインターネットで検索できます。「ボスニア・ヘルツェゴビナ」を検索し、ざっと読んでみて下さい。

第2次大戦後、ヨーロッパ地域で起きた最大の戦争でした。

元々、共産国家であったユーゴスラビアには異なる民族が混在して暮らしていた。

異民族同士が隣り合って暮らしていたり、同じ職場で異民族の同僚がいたり、中には異民族間の結婚もあったり、異民族同士で恋人関係の場合もあった。

そこへ、ユーゴスラビア政府が崩壊し、セルビア人、ボシュニャク人、クロアチア人の

各民族の独立機運が急速に高まり、同一地域内で民族間の紛争が起き、ユーゴ軍が残っていた武器を使った戦争へと広がった。

この戦争では、お隣どうし、職場の同僚どうし、恋人どうし、など非常に近い人どうしが、傷つけ合い殺し合うことになり、疑心暗鬼にかられ、やられる前にやっつけてしまえとなったり、近所の人どうしが、斧やナイフ・銃などで殺し合う、という悲惨な戦争となった。比較的人口が少なかったセルビア人は子孫を増やそうとしてか、ボシュニャク人女性をレイプし出産するまで監禁するというようなことまで行われたようだ。そのような実際の戦争の状況をえがいた詩だと思われます。

長年親しい友人であり、お隣さんであった人や、恋人どうしであった人が、急に傷つけ合う関係になってしまったことで、

「優しさの隣に生える苦しみの花」

「今日は昨日と何もかもちがう」

「地を這う憎しみ蒼くもつれ火となる」

「離れる術ない人差しと引き金」(「引き金から離れる術のない人差し指」ということ)

「撃たれた恋はどこに埋める」

などの象徴的なことばを使って、この戦争の悲惨さが描かれているのだと思います。(伊藤)

・かたばみ・・・根を張り広がっていく。歌詞にあるようにカタバミの鎖(根)、地を這う悲しみ、もつれて火となるという戦争に巻き込まれていく恐ろしさ。

・「Lu Lu Lu・・・」の歌詞のない部分に 言葉にならないたくさんの思いが詰まっている。

「かたばみ (酢漿草)」

カタバミ科の多年生雑草。春から秋にかけて黄色い花が咲く。種子と葡萄茎で繁殖する。長い柄をもった3枚の心臟形の小葉が特徴的。実は5角柱状で先がとがり、熟すると、実の皮がピッチと音を立てはじけて、種子が1m近くまで飛ぶ。すいものぐさ・すぐさ。季語・夏



なぜ、「ぶどう」と「かたばみ」に？—考察

クロアチアワインは有名で、当地といえば、すぐぶどう畑が思い浮かぶ。折角たわわに実ったぶどう畑はいまは、たま音がとどろく戦場と化している。「さとうきび畑」のうたのように。青年は、昨日まで友だった隣人を狙撃せよと命じられてぶどう畑の丘陵に匍匐(ほふく)して、銃で狙いを定めている。地面に伏した目の前にはかたばみが群生し、ほのかに咲く可憐な花もいまは憎しみの花となり、かたばみが自身の匍匐茎を這いめぐらしているごとく、

青年も地面に匍匐し、青い火となった憎しみもまた、地を這って行く。

葡萄 → 匍匐(ほふく、葡萄とそっくりの字面) → 匍匐している狙撃手、匍匐茎を這いめぐらしているかた

ばみーと詩人の連想が連なったのかも知れない。(三村)

石若雅弥作曲「君死にたまふことなかれ」(男声合唱組曲)

☆一口メモ☆：「君死にたまふことなかれ」は同じメロディーを何度もくり返すことにより、聴衆に詩の強烈なインパクトを与える。男性のみで歌うことにより、晶子の熱気・迫力・愛しさを、さらに強く表現している。

さかい利晶の杜 (1階が千利休) (2階が与謝野晶子記念館)

■与謝野晶子について

明治11年(1878)12月7日、現在の堺市堺区甲斐町にあった和菓子商「駿河屋」の三女として生まれました。家業を手伝いながら文学会に入会するなど多感な少女時代を堺で過ごします。22歳で上京し、歌の師である与謝野寛(鉄幹)と結婚して **12人もの子どもの母**となりました。代表作には、歌集『みだれ髪』や詩「君死にたまふことなかれ」があります。歌人として有名ですが、その活動は詩歌にとどまらず『源氏物語』の現代語訳や社会問題、教育問題にかかわる評論など、その表現世界の幅を広げてきました。特に評論文は、現代にも通じる普遍的なメッセージを発信し続けています。昭和17年(1942)5月29日に63歳の生涯を終えます。毎年堺では命日に、「白桜忌(はくおうき)」という法要がいとなまれています。

■与謝野晶子記念館

与謝野晶子記念館の中央部に設けた「晶子の装幀」コーナーでは、数多い晶子の本の装幀を紹介しています。造本にこった色彩豊かなものが多く、美術品としても高い価値があります。それは夫・寛の「後世に残るものでなければならない」という考え方によるものでした。装幀は藤島武二や中澤弘光といった一流の画家が手掛けています。

展示室内には晶子が生まれ育った駿河屋の店先を、実物大で再現しています。

「海恋し潮の遠鳴り数へては少女となりし父母の家」で知られる晶子の生家は、羊羹で有名な和菓子商で、大きな時計のある2階部分が洋風づくりという和洋折衷の建物でした。西洋好みの父が建物に洋風を取り入れ、欄間や廊下の障子にも色ガラスをはめ込んでいたようです。後にヨーロッパへ旅行した晶子は、色ガラスで飾られた教会の窓を見て、堺の生家のこと、父のことを思い出したと回想しています。

晶子は、このような西洋の香りのする家で少女時代を過ごし、その感性を磨きました。

与謝野晶子の生涯は、よくわかる展示となっています。ただし、堺市立の施設であるためか、「君死にたまふことなかれ」に関する資料は少ししか、展示されていません。南海本線：堺駅の西口広場に与謝野晶子の等身大の銅像が立っています。案外、小柄ですね。(明治時代の女性は通常これくらいですかね)

((注)「さかい利晶の杜」は長屋敏郎さんから投稿いただきました。)



小西美根子さんのお話から (2013.07.07)

(「君死にたまふことなかれ」を成功させる会実行委員会 2013年9月)

晶子がこの「君死にたまふことなかれ」の詩を書いたのは26才の時です。『みだれ髪』の発表の3年後です。この詩に詠われている弟は2才下の籌三郎(ちゅうざぶろう)で、晶子と一

番仲が良かったのです。晶子には6才年上のお兄さんもいたのですが、長男ですから本来なら「駿河屋」を継ぐべきなのですが、何しろ優秀で、早くから家を出て、東京大学で勉強した後日本の電気工学の権威者となられたそうです。晶子は仲のいい弟といっしょに文学のサークルにも入ったのですが、その弟が日露戦争にとられて、中国の旅順というところ・・・実際は旅順ではなかったそうですが、ともかくとても危険な地域に行かされたことに違いはなく、その弟が心配で心配でたまらなかつたわけですね。家に残されたのはお母さん、「過ぎにし秋を父君に後れたまへる母ぎみは」とありますが、去年の秋にお父さんが亡くなって、その後を継ぐのは弟しかいないわけですからよけいに心配でしょうがない。しかも弟は結婚したばかりでした。その奥さん、まさに「あえかに若き新妻」ですね。まだ18才で、おなかの中には赤ちゃんもいたのです。だから絶対に還ってきてほしい、そんな必死の願いを込めて詠った、それがこの詩なのです。それでもこの詩を『明星』に発表すると、晶子に対する非難ごうごうの嵐が吹き荒れました。「旅順の城はほろぶともほろびずとても何事ぞ」こんなこと言っているのか、自分の家のことしか考えていないじゃないか、ということですね。また「すめらみことは戦ひにおほみづからは出でまさね」天皇は戦争に行かないではないか、ということにも大町桂月などからたいへん激しい批判があったのですが、晶子は堂々と反論しています。

これは自然な自分の感情である。女はすべて戦が嫌いだということを言っている。誰だつて出征する時は、例えば新橋や渋谷の駅で送る時は無事に帰れよと言っているではないか。これが本当の人間のまことの心であるといっているのだ。まことの心、まことの声としてしか私はうたを作る方法を知らない・・・とてもわかりやすい、しかも筋の通った見事な反論ではないでしょうか。

こうして、晶子は『明星』や『恋衣(こひごろも)』などに都合3回発表し、少し改作もしましたが、この詩は晶子の代表作として多くの人々に知られるようになったのです。

ところで、晶子に「反戦思想」はあったのかということについて、色々な学者がそれこそいろいろ言っていますが、ここではさしたる問題ではないと思います。この詩でわかるのは、愛する弟を戦争で亡くしたくないという切実な思いです。

晶子はまた、戦争は「獣の道」と表現しています。別の詩では「野蛮」だとも言っていますから、戦争に対する晶子の思いもこれで充分わかるのではないのでしょうか。

大好きな弟が戦争にとられて、生きるか死ぬかの瀬戸際におかれている、大きな不安をかかえての毎日だと思います。この詩からそんな晶子の思いを汲み取って、一字一字をたいせつに、メロディに載せていただきたいと思っています。(以下略)

(注)「2013日本のうたごえ祭典inおおさか」で歌われた「君死にたもうことなかれ」その中心となって活躍された「君死にたまふことなかれ」を成功させる会実行委員会が主催された小西美根子さんの講演が掲載されていたので、参考にさせていただきました。(編集子)

ことばの解説

「すめらみことは戦ひにおお自らは出でまさね」；すめらみこと＝天皇、「出でまさね」＝出でまさずの已然形(過去形)、(いままで)お出になっていない。

「かたみに人の血を流し」；かたみに＝お互いに

「あえかに若かき人妻を」；あえか＝か弱くたよりないさま。